

松波むかし語り

ここに生き続けて

その22

今回のお客

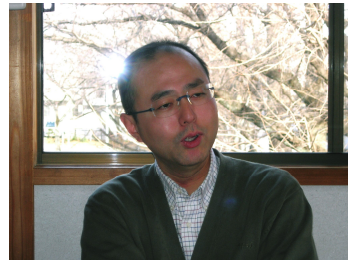
小野寺産婦人科の先生

おの であら つとむ

小野寺 勉さん 48歳 2丁目

“満月・新月の前後にお産が多いのは、学会発表はありませんが、経験上そう言えます”

—松波っ子の先生は、年中無休の忙しさの中でも、街のことに気をかけておられたのが印象的でした。



最近、「高齢化」と一緒に「少子化」ということがよく語られます。町内で産婦人科を開く小野寺先生にお目にかかったら、真っ先にそのことをうかがってみたいと思っていました。「そうですね、一人の女性が産む子どもさんの数が減っているばかりでなく、出産年齢も上がってきています」。それは何か問題に？「その分、出産にともなう危険



は増していると言っていると思います」。42歳で初産の女性も扱ったとありますが、「35歳以上の初産の場合は気を遣います」とのこと。

先生のおじいさんが登戸で商店を営んでいたそうですが、先生のおばあさん、助産婦（現在は助産師といいますが）であったハマさんが昭和30年代にこの地を開業、先生で三代目となります。この三代で取り上げた赤ちゃんの数は1万人以上にものぼるそうです。昭和42年に先生

の父、浩先生が産婦人科を開業しました。昨年も380人がここで生まれたそうです。いまは先生と、ほかに5~6人の助産師さんたちが交代で詰めてお産に対応しています。

最近、産婦人科の医師が減っているという話をよく耳にしますが？「たしかに、数年前、稲毛の先生が辞められてから、患者さんが増えたように感じますね」。中央区は比較的、分べんまでみてくれる産婦人科は少ない土地柄なのだそうです。やはりお忙しいですか？「そうですね、日曜は外来がありませんが、土曜は休めませんから、子どもたちの小学校の入学式にも出られません。出かけられるのは市内に限られていますし、年中無休といったところでしょうか」。小野寺産婦人科の予約は8カ月前まで埋まっている状態で、妊娠3カ月前までに予約しておかないとここで出産することは難しいといえます。

先生はここで生まれ、弥生小から付属中学校を卒業されたとのこと。「昔は向かいに松波ストアもありましたし、駄菓子屋も2軒あって、よく友達と通ったものでした。子どもの数も多くて、松波公園の場所取りまでしましたね」。「今年の夏祭りはとても出店がにぎやかでした。街がにぎやかさを取り戻すことはいいことだと思っています」とのこと。

そんな話をうかがっていたら、ケータイが鳴って、先生は駆けだしてゆかれました。



初代 小野寺ハマ先生



二代目 小野寺浩先生